様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ２９ 日現在

機関番号：３２６８３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２００７１

研究課題名（和文）近代中国におけるナショナリズムの形成とキリスト教

研究課題名（英文）Formation of Nationalism and Christianity in Modern China

研究代表者
渡辺　祐子（WATANABE, YUKO）

明治学院大学・教養部・教授

研究者番号：２０４４０１８３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：　19世紀後半以降、中国におけるキリスト教は中国社会からの反発を受けながらも、教育、出版事業を通して国民精神とナショナリズムの形成に寄与することを使命のひとつとした。本研究はこうしたキリスト教側の意図に注目し、この意図が1920年代の反キリスト教運動、教育権回収運動の中で中国社会から拒絶されるまでの経緯を明らかにし、拒絶に遭遇した宣教師たちが自らの「帝国主義的特権性」に気づかされ、彼らの伝道活動認識に変化が生じてゆく過程を、これまであまり使用されてこなかったミッションアーカイブを用いて考察した。同時に、この過程にはキリスト教の国家超越性が中華ナショナリズムに屈する側面が含まれることを示唆した。

研究成果の概要（英文）：　Christian missions in modern China from the latter half of 19 century had no less strong impact on the formation of nationalism in China. In this period, missionaries and mission societies intended to form and develop Chinese national spirit through educational and publishing enterprises based on Christian value. They regarded them as their Christian duties. This study focused on the process that their intention was clearly refused by Chinese own nationalism in 1920's and clarify how the missionaries came to notice their privileges based on the unequal treaties and how their recognition of the mission work was changed by it.

研究分野：近代中国キリスト教史

キーワード：近代中国　キリスト教　政教関係

１．研究開始当初の背景

本研究では、近代中国の政治・社会とキリスト教とのかかわりを、ナショナリズム形成を中心に考察することを目的とした。

従来、近代中国社会とキリスト教の政治的関係（中国語ではしばしば政教関係と言われる）は、ほとんど対立と軋轢の関係、すなわち中国の主権を脅かすキリスト教とそれを守ろうとする知識人、民衆との対立という図式でとらえられてきた。1860 年の北京・天津条約体制確立により、宣教師の内地布教が可能となってから頻発する反キリスト教闘争（教案）しかり、その行きつく先でもあり中華民族主義の最初の表明でもあった義和団運動しかりである。

これらの反キリスト教闘争は、政治的対立以外にキリスト教文明と中華文明との対立、キリスト教文化と中国伝統文化との対立という面を含んでいた。他方、1920 年代の学生および労働者を中心とする反キリスト教運動や、1925 年に激化する教育権回収運動（帝国主義勢力、すなわちキリスト教勢力の教育支配から中国人の教育権を奪還しようとする運動）となると、反帝国主義闘争という新たな変数が加味されつつ、もっぱら政治対立としてとらえられ、そこからは常に定型化された結論が導き出されていた。

1990 年代以降、中国キリスト教史研究は、地域社会研究、文化交流研究、キリスト教の土着化研究など多様な視点から行われるようになったものの、本研究が目指す中華ナショナリズムとキリスト教の相互補完的な側面の解明にはほとんど注意が払われていない状況であった。

２．研究の目的

本研究は、上記のような研究状況に鑑み、両者の相互補完関係や中国社会によるキリスト教会の包摂に注目し、新しい知見を提示しようとしたものである。

すなわち、清末民初の中国社会がキリスト教を政治的に利用し、キリスト教の側も積極的にその要請に応じて自らの地歩を確立しようとした両者の関係を明らかにすべく、具体的には次の二点を解明、考察することを目的とした。

（１）キリスト教のナショナリズム形成への参与は、「信教の自由」や「政教分離」といった、ナショナリズムとは逆方向に向く近代的価値の導入とどう関係したか。

（２）キリスト教会や宣教師らは、清末から民国期に至る最大の課題であったナショナリズムの形成をどのようにとらえ、それにかかわろうとしていたか。このテーマについては以下のサブテーマに沿って考える。

①1920 年代以降、各キリスト教学校はキリスト教必修科目廃止、カリキュラム内での礼拝禁止という国民政府の要求を受け入れたが、これは「信教の自由」の放棄という側面を含んでいた。キリスト教の生命線というべき信教の自由と引き換えに教育機関におけるナショナリズムの貫徹に応じたこの選択が、その後のキリスト教界に及ぼした影響を考察する。

②1934 年に国民生活全般の向上と民族意識の喚起を目指して蒋介石によって発動された新生活運動は、「清潔・迅速・確実」を運動原則に掲げるなど、キリスト教的諸価値とのある種の親和性を有していた。新生活運動に関するキリスト教界内部での議論を分析しつつ、キリスト教界がナショナリズム形成に及ぼした影響の一側面を明らかにする。

３．研究の方法

先行研究がほとんどないテーマであるため、もっぱら文献（一次資料）の蒐集、調査によって進めた。前回（平成 21 年度～23 年度）の科研費助成で収集した諸資料に加えて、本研究に必要な資料を、mission archives を中心にマイクロフィルム化されているものは購入し、日本で入手困難な資料については海外図書館、資料館を訪問し収集に努めた。特に 2013 年度の在外研究期間中に、武漢華中師範大学歴史研究所図書館や香港大学図書館マイクロ室から資料収集に当たって多大な協力を得、さらに中国大陸および香港在住の中国キリスト教史研究者たちの助言をも得た。

４．研究成果

助成期間中に発表した本研究テーマに直接関連する論文としては、『境界を超えるキリスト教』（2013 年）所収の「キリスト教伝道と国家」が、間接的にかかわる論文としては「華中伝道の祖　グリフィス・ジョン（1831－1912）試論」（2013 年）が挙げられる。

（１）前著においては、1925 年の 5・30 事件を機に起きた反帝国主義ナショナリズムの高揚を前に、自らに与えられていた条約上の不平等特権の放棄を考え始める宣教師たちの姿を宣教師コミュニティーにおける議論を中心に論じた。すなわち研究目的の（１）「キリスト教は清末から民国期のナショナリズム形成にどのようにかかわったか」にかかわるものである。

それまで宣教師たちは総じて自分たちの伝道活動に対する反発は、いたずらに「外国性」が強調され「中国のものではない」と決めつけられていることから起きているとし、キリスト教はむしろ中国の国民精神を涵養するもの、すなわち中華ナショナリズムの形成に寄与するものという立場をとっていた。しかしその主張に対する決定的な拒絶を突き付けられた彼らは、それまで享受していた特権こそがキリスト教受容を阻んでいたこ

とを悟り、特権を放棄するに至る。
　こうした経緯を経て 1927 年、初めての中国の教会である中華基督教会が成立し、「中国のもの」としてのキリスト教が実現することになった。

（２）後著は、武昌蜂起を目撃するまでの 50 年余りを中国で過ごし、湖北、湖南、四川のキリスト教伝道に多大な足跡を残したにもかかわらず、日本はもとより中国でも研究が進んでいない宣教師、グリフィス・ジョンにスポットをあてたものである。
　本論文はライフヒストリー的論考であり、本研究のテーマを直接扱ったものではないが、関連資料として、グリフィス・ジョンが清末の革命運動に言及しているいくつかの資料を読み込んだ。政治的にはリベラルであったグリフィス・ジョンは、清末の変法運動や革命運動には直接的なコミットこそしなかったものの、決してこれらの運動に無関心だったわけではない。ジョン関連の資料には、宣教師のごく平均的な中国観、ひいては中華ナショナリズム観、すなわち、改革はもはや後戻りできないとして、その動きに期待を寄せつつも、革命運動とは距離を保つ見方が示されている。

（３）研究目的の（２）については、具体的な成果を発表するには至らなかったものの、2009 年に発表した民国初期中国教会の信教の自由を求める運動に関する論考、「民国初期における信教の自由と中国キリスト教会（1913－1917 年）― 「孔教国教化」への対抗運動を中心に」（『キリスト教史学』第 63 集）をさらに発展させるための資料調査を行った。
　現段階で得られた知見は以下のとおりである。
　1910 年代に起きた、宗教としての孔子教を国教化する動きに対抗し、「信教の自由」を掲げて国教化を阻止したキリスト教会は、1920 年代半ばからの教育権回収運動の中で、宣教師を派遣し教育に多額の献金を行っている海外伝道局の反対を押し切り、キリスト教教育の自由を手放す形でナショナリズム形成に参与する決断を下した。
　「愛国愛教」を肯定的にとらえ、キリスト教の中国土着化を重んじる研究者はこの決断を好意的に解釈するが、原理的に考えると、この時期のキリスト教学校の判断が実は「信教の自由」や「キリスト教教育の自由」の定着の阻害要因として機能した側面を見逃すことはできないだろう。この論点については、2015 年から科研費の助成を受ける研究において、引き続き追究してゆきたい。また新生活運動へのキリスト教の影響についても、引き続きとりくむべき研究課題としたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　4　件）

① 渡辺祐子、日本における中国キリスト教史研究について―日中戦争期を中心に―、明治学院大学キリスト教研究所紀要、査読無、第 47 巻、2015、307-325

② Yuko Watanabe, Japanese Studies on Christian History in China, with a Focus on the Period from 1937 to 1945, Asian Christian Review, 査読無, Vol.7 No.2, 2014, 46-57

③ 渡辺祐子、華中伝道の祖グリフィス・ジョン（1831－1912）試論、明治学院大学キリスト教研究所紀要、査読無、第 46 巻、2014、71-104

④ 渡辺祐子、中国キリスト教史研究から見る東アジアキリスト教交流の可能性、福音と世界、査読無、第 68 巻 3 号、2013、30-35、42-43

〔学会発表〕（計　8　件）

① Yuko Watanabe, Japanese Studies on Christian History in China; with a focus on the period from 1937-1945, International Seminar on Historical Perspectives of Inter-Religious Relationship in Asia, Chiangmai, Thailand, 2014, Aug 5th.

② 渡辺祐子、宣教師が見た日露戦争、東アジアキリスト教交流史研究会、福岡女学院大学（福岡県福岡市南区）2014 年 7 月 26 日

③ 渡辺祐子、在華宣教師漢文著作と反キリスト教闘争、東アジキリスト教交流史研究会、神戸学生青年センター（神戸市灘区山田町）2014 年 1 月 24 日

④ 渡辺祐子、華中伝道の祖　グリフィス・ジョンについて、キリスト教史学会東日本部会、明治学院大学（東京都港区白金）2013 年 12 月 14 日

⑤ 渡辺祐子、近代日本基督教史研究上的幾個問題（近代日本キリスト教史研究上のいくつかの問題点）、上海大学歴史学部日中韓キリスト教史セミナー、上海大学、中華人民共和国上海市、2013 年 12 月 2 日

⑥ 渡辺祐子、如何面対過去的戦争　以明治学院的歴史為例子（過去の戦争に以下に向き合うか　明治学院の歴史を手掛かりに）華中師範大学訪問学者特別講演、中華人民共和国湖北省武漢市、2013 年 10 月 28 日

⑦ 渡辺祐子、キリスト教と中国社会－中国プロテスタント 200 年の歴史を振り返る、東京神学大学東北アジア教会史研究会（招待講演）東京神学大学（東京都三鷹市大沢）2013 年 3 月 8 日

⑧ 渡辺祐子、中国キリスト教史研究から見る東アジアキリスト教交流の可能性、恵泉女学園大学シンポジウム「東アジアキリスト教交流の未来への展望」恵泉女学園大学（東京都多摩市南）2012 年 10 月 27 日

〔図書〕（計　2　件）

① 渡辺祐子　他、この国はどこへ行くのか～教育、政治、神学の視点から～、いのちのことば社、2014

② 渡辺祐子　他、境界を超えるキリスト教、教文館、2013

６．研究組織

(1)研究代表者

渡辺祐子（Watanabe, Yuko）
明治学院大学・教養教育センター教授

研究者番号：20440183